

# ヘリテージ・グランドデザイン作成のための、ルーブル美術館改修 計画を対象とした建築リノベーション・デザイン手法の研究

代表研究者 山村 健  
東京工芸大学 工学部 工学科 准教授

## 研究要旨

本研究は、フランス・パリにあるルーブル美術館を対象としたヘリテージ・グランドデザイン作成のための、建築リノベーション・デザイン手法に関する研究である。具体的には、改修を担当したイオ・ミン・ペイの設計手法に着目した研究である。ルーブル美術館は城塞、王宮、そして美術館と改修を繰り返してきた。現在は、ルーブル・ランスやルーブル・アブダビなど世界規模でネットワークを構築し、古典美術を扱いながらも現代の美術シーンを牽引する存在である。

そのルーブル美術館のアイコンとなっているのは、1989年に竣工したガラスのピラミッドである。ミッテラン大統領が主導したグラン・プロジェ計画の一つとして計画された。設計者は中国系アメリカ人のI.M. ペイである。

本研究では、I.M. ペイが設計したガラスのピラミッドを対象として、なぜピラミッドの形態が選択されたのかをリノベーションの視点から検証するものである。

その検証のアウトラインを以下に示す。ピラミッドはエジプトの王家の墓として建設された古代建造物である。エジプトでは死後は再生を象徴した建物である。20世紀以降美術の重心がヨーロッパからアメリカへと偏心し、それを再びフランスへ復権すべくミッテラン大統領は文化事業の再生を掲げた。つまり、文化再生の意味を託してピラミッドが選択されたことが仮説としてあげられる。しかしそれだけではなく、I.M. ペイは「場のルーツ」をよむことについての言説を残していることから、その言説の関して建築論的に検証を進めた。

ルーブル美術館を西に進むと、カルーゼルの門、チュイルリー公園、コンコルド広場、凱旋門、新凱旋門と歴史的モニュメントが並んでいる。通称「歴史軸」と呼ばれるパリ独特の都市空間である。本研究はこれらの建築史的特性に着目して考察を進めた。カルーゼルの門はナポレオン一世率いるフランス軍がアウステルリッツの戦での勝利を記念して建立された。デザインは、ローマ時代のコンスタンティヌスI世の凱旋門を高度に模倣した建築である。つまり、カルーゼルの門はローマ様式の建築であるといえる。同様にして、チュイルリー公園はフランス・ルネッサンス式の庭園、コンコルド広場はバロックの都市空間、凱旋門は新古典主義の建築、新凱旋門はモダニズムと、それぞれが建築史の主たる様式を表現した建築が時系列に配置されている事実が抽出される。この視点に依拠してペイの言説を再考するならば、ルーブル美術館はローマ以前の建築様式が求められることになり、エジプト様式の妥当性が指摘できる。I.M. ペイの「a natural solution」と場のルーツの言説に依拠し、ルーブル美術館のリノベーションが都市文脈まで包含して達成された手法であるという発見は、新たな知見であると考えている。